

GPT-5.6がもたらす知財実務の変革：AIエージェント時代の到来

GPT-5.6 モデルラインナップ

3つの最適化されたモデル



Sol (最高性能)

高度な推論、コーディング、サイバーセキュリティ

\$5.00 / \$30.00

新機能「Max推論」と「Ultraモード」：長時間思考する推論機能と、複数のAIが連携するマルチエージェント機能により、長期的なタスクの自律性が向上しました。



Terra (バランス)

日常業務、コストパフォーマンス重視

Terra: 前世代の性能を半額で提供

入力\$2.50 / 出力\$15.00

(1Mトークンあたり)

中核モデルのTerraは、GPT-5.5と同等の性能を持ちながら、1Mトークンあたりの価格を約半分に抑えています。



Luna (高速・低価格)

大量データ処理、低速タスク

入力\$1.00 / 出力\$6.00

(1Mトークンあたり)



Sol
(フラッグシップ)

入力\$5.00 出力\$30.00

Terra
(バランス型)

入力\$2.50 出力\$15.00



Luna
(高速・低価格)

出力\$6.00



AIエージェント時代

知財業務への劇的な影響



特許調査の自動化と検索の深化

自然言語処理 (NLP) と意味的類似性検索により、キーワード検索から「概念検索」へ進化し、クレーム要素の自動分解も可能になりました。



IPランドスケープの期間短縮

従来は数週間を要していた眼合分析や技術動向のレポート作成が、AIエージェントによりわずか数時間で完了します。



明細書作成における「人間とAIの協働」

従属クレームの提案や実例の初像はAIが担い、独立クレームの設計や事業戦略との整合性は人間が判断する役割分担が定着しています。

法的課題と未来の役割

法的課題

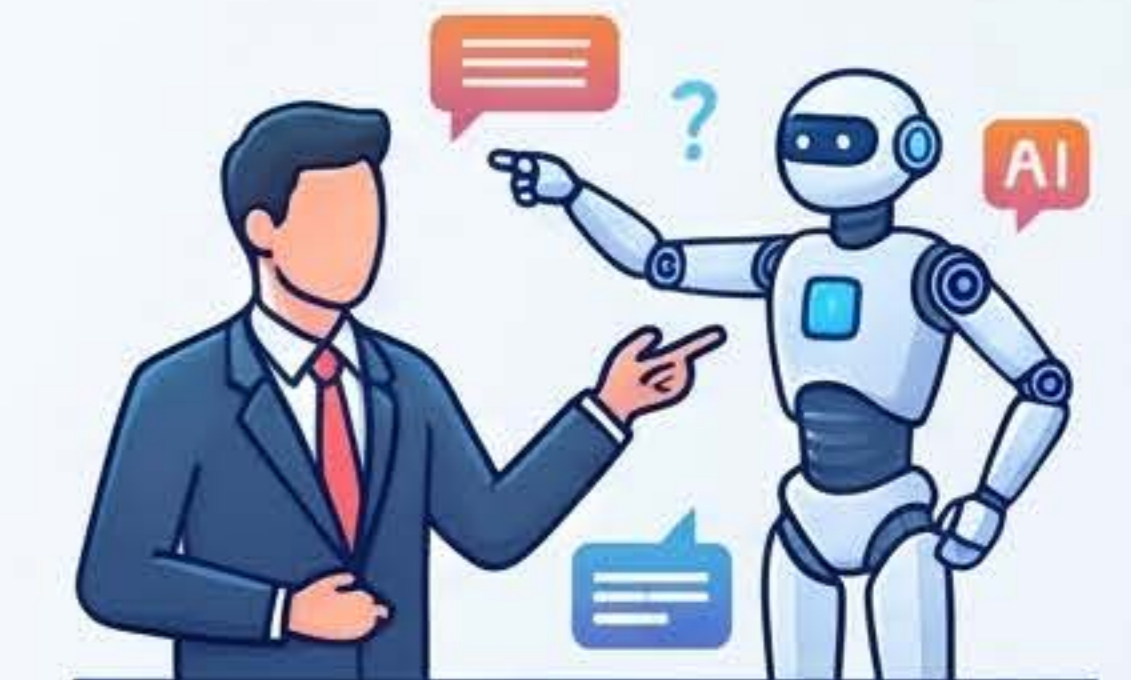


発明者は「自然人」に限定
米特許商標庁 (USPTO) や日本は、AIを利用した発明であっても「人間の重要な貢献」が必要であるとの立場を維持しています。



意匠実務における「先回り大量生成問題」

AIによる類似デザインの大量生成・公開により、真の創作者が登録できなくなるリスクが懸念され、法整備が急務となっています。



知財専門家の新たな役割

定型作業から解放され、AI生成物のファクトチェック、高度な権利範囲の設計、プロンプト管理といった「高次元のマネジメント」が主業務となります。